

# 藁

失われつつある

「わら」の文化

**舂**<sup>もみ</sup>

を取り去り、残った稲の茎の部分のことを稲わらと呼びます。

弥生時代に稲作が日本に広まって以来、「わら」はその耐久性から、ありとあらゆる暮らしの道具として加工され、利用されてきました。

しかし、稲作の機械化が進み、材料となる「わら」の量も減少し、代わりとなる日用品が容易に手に入るようになると、「わら」は次第に人々の生活から姿を消していきました。現在では日常生活の中でほとんど触れる機会がありません。それはここ美郷町においても同様です。



## 美郷町歴史民俗資料館

失われていく「わら」の文化を残していくために、美郷町歴史民俗資料館のわら展示室には約600点のわら細工が展示されており、全国的にみても最大級の収蔵量を誇っています。さまざまな用途に用いられてきたわら細工や、当時の生活の様子を再現した展示など、先人の知恵とわらの温もりを感じることが出来ます。

これらの素晴らしいわら細工資料は、主に旧千畑町の「ふるさと懇話会」の皆さんが収集したものを、当時の郷土資料館に寄贈いただいたものです。その資料的価値が評価され、ことし3月、わら細工384点と制作用具37点が、県有形民俗文化財に指定されました。



■歴史民俗資料館に展示されるわら細工

## 美郷わらの会

わらが人々の生活から遠ざかっていく一方で、このわら文化を残していこうという活動も行われています。ことし3月、美郷町に伝わるわら細工の技術や文化を後世に伝えることを目的に、町内外の有志により「美郷わらの会」が設立されました。

## 鍾馗さま

本堂城回地区の本堂城跡地には一本の大きなケヤキの木があり、この下に、わらで作られたこれまた大きな人形が寄り添うように佇んでいます。

静かに住宅地の方向をにらみつけるこの人形は地元の人たちから「鍾馗さま」と呼ばれ親しまれています。今なお残るわら文化である「鍾馗さま」について、制作に携わり続けてきた進藤晃成さんにお話を伺いました。



■進藤晃成さん

### Q. 鍾馗さまについて

疫病を追い払う神様ともいわれ、怖い顔をして、悪いものが入ってこないようににらみを利かせています。集落を見守る信仰の対象です。かつては矢島川のほとりにあったようですが、水が安定しないことから、現在の本堂城跡のケヤキの下に祀ることになったようです。

### Q. 歴史について

いつからの風習なのかは不明ですが、1800年代に菅江真澄

が本堂城跡を訪れた記録が著書の「月の出羽路」にあります。そこに大きなわら人形が記されています。

以前はこの辺りの集落にそれぞれ鍾馗さまが作られていましたが、今ではなくなっています。この地区でも昭和40年代ころからコンバインの導入などにより、稲わらの収穫が難しくなり、制作を中断していましたが、平成元年に集落組合の合併を機に再開しました。

### Q. 制作について

毎年6月の田植の後に制作しています。材料となるわらは、前の年の稲刈りの際に代表が保管しています。この時のわらは、鍾馗さまの制作と、冬の天筆焼

に利用します。

大きな体ですので、材料のわらは80束にもなります。(※だいたい親指と中指でつかめる量が1把、それが10把で1束となります)。腕を作る人、足を作る人などそれぞれの部分を担当し、地区の皆が総出で制作すると半日程度で完成します。

昔は、この完成した胴体を集落の若い衆が担いで本堂城跡まで運んでいました。鍾馗さまを背負うことで一人前と認められ、妻を娶うことを認められた時代もありました。



■静かにたたずむ鍾馗さま